

生涯学習情報紙



2020

11月

発行：大和村教育委員会事務局・中央公民館

第323号

中山昭二兄による四方山話(よもやまばなし)



和光高校来島シマの文化に触れる

昭和43年の村民体育大会は大雨の中戸円校で行われた。午前中最後のプログラムは大和中男子によるタンブリングで、見せ場は、天橋立(あまのはしだて)です。約80名の男子生徒が練習に練習を重ね当日を迎えましたが、大雨で不安は増すばかり。この天橋立というのは高さが電柱ほどの杉丸太で造ったハシゴを校庭の両端に立てその間を二人組の組体操を数珠つなぎにしてハシゴは8名ほどの生徒が固定し、その周りも組体操で固めて吊り橋の形を作るものです。クライマックスはハシゴの先端に登った生徒がポーズを決める時です。大和中での練習や大運動会では無事に披露できた。遂に大観衆の中しかも大雨の中での組体操が始まった。二人組、三人組、五人組、八人組と演技は進み、いよいよ最後の天橋立になった。そして校庭の両端にハシゴが立った。固唾を飲み見守る観衆と演技者の緊張が最高潮に達している中、ハシゴの前では田中・宮田君が汗止めのハチマキ姿で大空を見上げていた。合図の笛が鳴った。二人はハシゴの先端を目指しまるでサルのように登っていった。そして先端に足を絡め、大雨の大空へハンザイのポーズを決めた。大観衆の喝采を浴びながら二人はゆっくりと降りてきた。タンブリングの演技が終わり昼食となったが、田中君、宮田君は大役を終えた達成感に胸一杯になり食事ができなかったそうだ。大人になってから田中君に戸円校でのハシゴ登りの事を聞くと、「あれほど怖



東京から来島した和光高校生26名が、津名久公民館にてシマの昔の暮らしぶりや現在までの歴史の流れ、昔からの伝統文化、消えかかっているシマの方言などについて、津名久の中山区長を講師に迎え講義が実施されました。講義の中で、昔話(蛙の親孝行)を方言に置き換えて、生徒全員に読んでもらいました。生徒達は、奄美語の発音や言葉の難しさに戸惑いな

就学時子育て講座



来年度小学校入学予定者の保護者10名を対象に、嘉原カヨリ先生(奄美市)を講師に迎え、子育て講座を実施いたしました。受講者からは、「読み聞かせや、自然にふれることの大切さを教えていただきました。これからの子育てに役立てていきたいと思っております。」などご意見がありました。



懐かしの一枚 (S30年頃の戸円)

S30年頃の島内交通と、物流の要を担っていた「名音丸」です。海水浴でしょうか？子ども達はハダカ裸足の子が多く見うけられます。

高倉にハトが巣作り



今年葎き替えをした高倉に、ハトの巣完成！普段は換気のために戸は開けたままなのですが、前回の台風で備え戸締まりをしていたところ、戸前に巣が完成していました。しばらく巣立ちまで見守ることとなりました。

11月の花～センニチコウ [千日紅]



莖先にボンボンのような丸い花(頭花)をつける。花のように見え丸い部分は苞(花のつけ根につく葉の変形したものが発達したものである。花の色はピンク、白、紅紫などがある。花期が長いことから仏花として好まれ、名の由来ともなっている。江戸時代中期には既にドライフラワーとして利用されたという記録もあるという。俳句の季語は夏である。

サシバが飛来 (タカ科)



奄美に秋の訪れを告げる旅鳥のサシバが飛来し、「ピックウィー」という鳴き声を響かせています。奄美の諺で「**びゅーちばひゅー**」(サシバが)びゅーと鳴けばひゅー(シラ)が喰い(釣れ)だすという意味だそうです。また、本土から奄美に南下したサシバは、一休みしたら越冬地の東南アジアへ向かいます。一部は冬鳥として奄美に残ります。